SD トークセッション　＜岡本泰子アンケート＞

質問１　「スペースデザインとは」
あなたが思う新制作のスペースデザイン(部)とは何ですか？その魅力はどこにありますか？

表現方法の多様性。専門分野や世代、派閥の隔たりがなく互いに認め合う関係性。
さまざまなジャンルの作り手が切磋琢磨する実験場。それぞれの作品が持つ空気感がひしめく会場の賑やかさが魅力です。

質問２　「テーマ」
あなたの作品（または創作）のテーマや特徴は？

「命を内包する形」をテーマに、繊維素材を使った立体作品を制作しています。同時に古生物に命を吹き込む復元画「サイエンティフィックイラストレーション」も手がけており、かたちや構造の美しさを見つける貴重な場となっています。自然科学の仕事と関わることは自身の創作活動にとって不可欠で「自然形態への興味→作品へと昇華」という関係を続けて展開の可能性を探っています。

質問３　「素材と技法」
素材と技法についてのこれまでの工夫などを簡単に教えてください。

極厚手のウール地とポリエステル糸を使い、パーツの組み合わせで有機的な立体とする事にこだわっています。紙上でのエスキースはせず、展開した際に平面となるよう意識しつつ工業用クレイで原型を作ります。オリジナルの刺繍デザインが縫える「家庭用刺繍機つき PC ミシン」を使用し、アナログとデジタルを行き来しながらの制作は、手仕事のみでは難しい造形表現が可能な興味深い技法です。

質問４　「空間表現」
美術館の展示空間に作品を表現する際に特に意識することは何ですか？
また、これまで経験した都美術館と新美術館に対する意識の違いはありますか？

作品を取り巻く空気感、佇まい。作為的に見せないこと。そこに生息しているかのような自然な存在感。
都美術館：天井の高さ、床材の質感、煉瓦の壁（白い作品が映える）、有効ボードに負けない強さ。
新美術館：壁の白さ、中吊り可能なところ。
作品は立体が中心ですが、自身で課している条件は「素材の特徴を活かし、作品の構造とリンクしない支持体は用いない」ことです。そのため作品サイズや素材によって表現方法が異なります。
大きな作品：「張力・重力」によって生まれる形。ある程度の完成形を想定し、パーツを現場で吊りながら組み立てることもあります。
ミニアチュール：素材の性質を生かし自立するかたちを意識しています。

質問５　「イメージの源泉」
あなたの創作イメージの源泉は何ですか？（複数可）

自然界の摂理、構造的なもの。特に生物の巣、骨格など命を守るために進化・適合したフォルム。
特に影響を受けたモノ・コト・ヒトなどがありましたら教えてください。
島貫昭子、関島寿子他、これまで出会ったファイバーアーティストの方々、ピーターコリングウッド、博物館の仕事で出会う標本たち

質問６　「ターニングポイント」
これまでの創作活動（創作テーマ）の変遷やターニングポイントについて教えてください。

サイザル麻（編み技法）・糸芭蕉（編み技法）・PC ミシン刺繍によるニードルワークなど、制作環境によって素材・技法・作品サイズは変わるが、基本となる創作テーマは変わらない。

質問７　「エピソード」
これまでのエピソードを幾つか教えてください。
（SD との出会い、応募のきっかけ、初期作品について、失敗談など）

伝統工芸系以外の公募団体を探していたところ、友人に勧められたのが新制作との出会い。初めて会場で目にした作品の自由さと幅広さに驚いた。活躍中の繊維造形作家と同じ場に立てるのは大変魅力的であり、大学関係の知り合いが少ないところも気に入った。
都美術館の壁面一杯の高さで出品し初入選したものの、実際は上には機材が吊られていた。現場を確認してから制作すればよかった。

質問８　「メッセージ」
創作活動をされている方々（または出品を目指す人たち）に向けた情報として、ご自身が関心を持っている現代のデザインや美術の作家や作品を挙げてください。併せてそのような方々に向けて何かメッセージをお願いします。

彫刻部会員の伊藤禮太郎先生（故人）にいただいた、「岡本さんの作品は無愛想だなぁ。このままずっと無愛想で行きなさいよ（笑）」というアドバイスを大切にしています。人に媚びない制作姿勢で自然科学系の情報や発見にアンテナを張って自分らしさが出せるよう心がけています。哲学的な題名や難しいンセプトなどが無くても、作品の大小にかかわらず、形の力強さは伝わると信じています。

質問９　「ビジョン」
あなた自身のこれからのビジョンと SD 部の今後の展望をお聞かせください。

仕事で関わったラスコー展（国立科学博物館、2017）の「骨製の縫い針」に感銘を受けました。2万年前、クロマニヨンの人々が現在と変わらぬ形の道具を手にし、衣服を纏って氷河期を生き延びた結果、人類の繁栄に繋がったのだそうです。最近はそんな壮大な時間にも思いを馳せつつ作品に取り組んでいます。そしてデジタル、アナログに捉われず、その時々に出会う素材や技法で表現したいです。